

島虎政集

卷之四

しまお としお ぜんしゅうたい かん
島尾敏雄全集 第9巻

一九八二年一月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1982 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第9卷

ブックデザイン

平野甲賀

島尾敏雄全集第9巻・目次

夢のかげを求めて——東欧紀行

ワルシャワまで

9

ワルシャワにて

53

墓地のにぎわい

69

ワルシャワの町歩き

90

ワルシャワでの日々

110

クラクフへ

125

クラクフにて

150

カメドゥウフ修道院まで

176

カメドゥウフ修道院にて

188

ヴィエリチカまで
ヴィエリチカにて

214 203

ふたたびワルシャワへ
スターレ・ミアスト界限
ニエポカラヌフへ
ニエポカラヌフにて

272 258 245 229

またワルシャワへ
イエジヨルナ散策
トゥウシチへ
トゥウシチにて
トゥウシチから

344 336 323 308 293

二人のスタニスワフ
チェンストホーヴァへ

372 354

チェンストホーヴァにて

オシヴィエンチムへ

オシヴィエンチムまで

ブジェジンカにて

さらばワルシャワ！

プラハまで

プラハにて

マジャールを越えて

ベオグラードのホテルにて

ベオグラード市街瞥見

人形劇場

カレメグダン城址

ラコヴィツァ往復

522 512 504 493 482 471

457 446

436 426 414 401 388

ふたたびモスクワへ
ふたたびモスクワにて
モスクワの凍え
コロミンスコエ村へ
さらば！ モスクワ

571 563 552 543 529

夢のかげを求めて

——東欧紀行——

ワルシャワまで

旅のおそれ（十月二十三日）

出帆のまえの晩、横浜の港に近いホテルに投宿した。どこかの部屋で電話の呼鈴が鳴っているのがきこえると、胸のあたりの肉が痛む。不在らしくしばらく等間隔のまを置いて鳴っていたが、軽いはき気をさそわれた。部屋の外で声高の話し声が、絨毯をふむいそぎ足のにおいもの音とともにきこえても、からだの中の力が脱けて行く。家の外に出て行くのがおそろしいのか。そのまえの晩、ようやく三度目の電話が妻に通じた。一度目は図書館の当直職員に構内の家の方に連絡してもらったが、誰もいないという返事だった。二度目はサインは届いているのに、誰も受話器をとるふうではない。当直は用ができて不在のようで、当直室で空鳴りしているのが目の底であざやかになる。そのときは、からだがふるえそうだった。そして三度目によく妻の声を私の耳がとらえた。一度目の電話のときに家をあけていた理由をいっしんに述べるその声が、やさしく、そしてすきとおってたよりなげなので、この先の旅がいっそう億劫になった。東京で出発を待つ間も、行かなくてすむような事情が起き

ることをねがい、それまでの準備のすべてを捨てて、家に帰りたい気持ちに覆われていたが、そうもできずに、時の移ろいをじっと見ている状態があった。

どんな魔がさしたか、東欧に行ってみたい気になっていた。東欧と言っていいかどうか、私の言いたいのは、ロシア人とドイツ人には含まれた地帯のこと。たとえばそこには、ポーランドとか、チェコスロヴァキア、そしてハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、アルバニアなどの国々がある。そこは私のヨーロッパ理解の中で、うまく消化できずにわきにどけて置いた場所のようにも思う。もっとも二年ほどまえ、ポーランドを十日ばかりのぞいてきた。それがあるいは誘いになったかもしれない、またスラヴの人たちにひきつけられるかたむきを私は持っているから、知らず識らず、そのあたりに思いが馳けるのか。ナホトカ航路のあとハバロフスクからモスクワを通る道を選び、そして帰りも同じ道をもどって来ることを考えていたから、そのほとんどを、スラヴの人たちのあいだを縫うことになるようであった。

じょうだんのように、ポーランドにもう一度行ってみたいなどと言っているうちに、はなしが具体化してきた。勤め先の機関からの休暇の許可、そして費用の問題が、支障なくほどけただけでなく、まずなにより、この旅を妻が乗気になって私に出発をすすめていた。出発まえの諸手続きや、旅の計画をすすめるあとさきに、決定的なつまずきは起きなかった。むしろ起きることを待っていたのだが、すべて支障なく進行したあとは、出発するよりほかはない。ただ旅の季節としては少しおそいのではないかという懸念はあった。横浜港を出航する予定が十月二十二日。そして予定の国々を経巡り、も

う一度ナホトカにもどって船に乗るのが十二月六日ときめられていたが、私の行こうとしている場所
はすべて北海道より北寄りの緯度にはいっていった（いちばん南のベオグラードでさえ）。ふだん冬の
平均温度が摂氏の十四度もある南の島に住んでいる私に、寒いところの旅行は気が重い。でもとうと
う、肩掛鞆のほかスーツケースと風呂敷包を両手に持ち、出入国と検疫の場所や税関を通りぬけたあ
とは、大栈橋の岸壁に横着けになっているバイカル号に乗りこまないわけにはいかない。

ナホトカ航路（十月二十四日—二十六日）

二年まえ、この航路をおなじバイカル号で往復したから大体の様子はわかっていたようなものだ。
このまえの帰りのとき、旅の終わりのよろこびとともに、この次この船に乗るのはいつのことか、心
許ない寂寥があった。それはこの船ではたらいっている口数少ないロシア人たちのすがたかたちへのこ
のまじさがそういう気持ちにさせたと思う。かれらはそれまでに私が見たロシア人たちとかさなってい
て、先入感としてのなつかしさがあったが、旅の終わりにいつも感ずる寂寥に、ひとしおかみつかれ
てしまったのだろう。少しおかしいことだが、旅先での同感が、その場所を去るときに、断絶につき
あたった気持ちにおちいるあの感情で、自分の生まれつきと過去の具体からどうしても脱け出すことが
できぬと思い知ったときに起こる現象のようなのだ。それで横浜に入港するまえの真夜中、寝静まっ
た人々の影の見えぬ後甲板で、私はわけのわからぬたかぶりをもちあまし、声を出して泣いた。それ
らのことが思い出されたが、それはみな自分ひとりだけのこと、今度は乗客が少なく、まえのとき
二回に分けて準備された食卓の組別けも、一組一回だけ。それでもなお食堂は閑散として見えた。お

およそ四十人ほどいたろうか。まえのときもそう思ったが、このコースの旅行者たちは、ちょっと強いくせを持っているような気がする。いや、くせを持っているのではなく、このコースで旅行をする、おのずからくせがきわだって出てくると言った方がいいだろう。各国人のいりまざっている中で特に日本人が多いせいかもしれないし、またソビエトを通りはするが旅の目的は別のところ、という人が多いからかもしれない。その上この国では各自の気ままな旅ができず、横浜からモスクワまでの船も汽車も飛行機も、あらかじめ定められており、そのきまったパイプの中を、わきにそれることも叶わず、あとになり先になりしながら、いっしょに五、六日のあいだをすごすことが、そのかたむきをいっそう強めるのかもわからない。いっしょにすごすと言っても、おおかたは口をききあうこともなく、ただ度々目にしないわけにはいかぬおたがいの顔かたちや挙措のくせなどに馴染むだけで、それぞれのイメージを抱きながら、ソビエト公営旅行社のインツーリストが定めた道筋を、身がらをあずけつ放しのまま、モスクワまで送りこまれて行くわけだ。はじめからの団体員でなければ、たまたま船室や食卓を共にして知り合った機縁がそのままモスクワまで持ち越され、そしてドモジエドボ飛行場で、インツーリストの指示に従い定められたホテルにそれぞれ別かれて行かなければならない。その素性や行先も深くは明かすこともなく、中にはモスクワまでも寝起きを共にしながらおたがいの名前さえ知らず、まず会うことのない別離に身をゆだねてしまうのも、日々の消えゆく生と似通っていないわけではない。またまえに「船ではたらいっているロシヤ人たち」と書いたのは、うすでの生地白いそでなしブラウスを着けただけの食堂の給仕や、売店やバーの係の女、日本語もいくらかはなせる船客係の男女職員、部屋や便所や廊下をくりかえし清掃している掃除女、そして甲板を洗い、ご

みをけずりつついる船員などのことで、私はかれらに豊饒な寂寥を感じ、気持が吸いよせられたからだ。それは大洋のただ中に木の葉のようにただよう限られた船という環境に覆われての印象かもしれないが、はなやいだ洗練は感じられないが、素朴でひなびたいなかくささをただよわせながら、やわらかにかたりかけてくるまなざしが私の心をつかんでしまう。こうと思ひ定めたらわきめもふらず、度合を越えてもやりとおすようなからだのしんにひびいてくるがまん強い親切。思ひのほかに小柄な、しかし肉づきのいいからだに柔軟で頑丈なねばりが感じられ、そしてそれはユーモラスでさえあった。たぶん私が見たいものをそこに見ただけだが、かれらと二度目の接触のあとでもその意見は変えなくてもよさそうなのだ。ただ同じ船に二度乗ってみると、私の方にも初心のはずみはなく、かれらからの感受は、まえにくらべて平板なものになってはいた。それはもしかしたら、帰途の寂寥を先取りして、そこにおちいらぬよう自分を閉じこめたからだったか。いやそうではなく、私の視野の、ぶれが収まって、現実的な受容態勢がととのったのだったか。

私の船室は四人部屋。パリのレストランにコック修業に行く青年と、モスクワにある友好大学の大学院にはいる二人の学生がいた。三人とも日本人だが、パリに行く青年の父親は、スペイン系のアメリカ人だと言っていた。青年たちの会話の中にはいつていと、いきおい疲労を覚えるが、これは彼らに責任のあることではない。友好大学の学生は物理と自然科学を専攻しているため、ロシア語で書かれた専門書を読み、ロシア語も、生活の中での調子のようにはなしているようにきこえた。またロシア語だけでなく英語やフランス語もその国の人らしくはなすこともできるようだし、自動車の国際免許証なども見せてもらったのだった。

さて、あとになってそれがひと家族の者だとわかった白人たちのことを書いておこう。まず、太ったおばあさん。私たちの船室に近く、いつもドアをあけた船室があつて、その中でひとりの太った老婆が、いっしんになにかを片づけているすがたが見えた。それは周囲に関心を示さず、自分だけの世界でこつこつと実りのない片づけ仕事をしているように見えた。またふたりづれの少女が居た。ひとりにはまるまると太り、背は低いが成女のように見え、片方はやせて背が高かった。はじめ私は彼女たちを船の要員と見あやまり、どちらも年配の女のように思っていた。無造作なふだん着の服装、そして船員のような中年の男たちといっしょに声をたてて笑い、甲板の上で活発なダンスのまねをし、冗談に口をとがらせて怒り、歩くときは鼻うたをうたっているふうであつた。でもいつも二人はもつれるようにいっしょに歩いてゐた。ふたりが姉妹で、まだ十代の少女だということをいつ誰にきいたのだったか。それまでは太った方の少女を私はもう中年にはいりかけたわけ知りの女のような気がしてゐたのだから。私の目はなにを見てゐたのだったか。まだ十代の少女ときかされて、彼女たちは私の目の中で急に幼なくなつた。太った方が姉のようにも思えたが、彼女がはずむぐむまりのように、あたりの空気をかきまわしてはやてのように通りすぎるとき、そのかげのようなやせぎすの背の高い妹が、あとを追うようにくっついてゐるのが認められた。姉の方は誰彼のみさかいなく口をきき笑いかけしかめ面をしてみせるようであつたが、根は人ぎらいなのかも知れず、はずむからだの中で拒否のしんが強いとも思えた。妹の方は人見知りをし、どちらかというとき意地悪そうな骨ばつた細面の白い容で、いつも姉と行動を共にしながら姉に対する批判者の気配をただよわせてゐたが、もしかした

ら彼女の方が人なつこい性格なのかもしれない。しかし、いずれにしろ流行のそれではない貧しげな服装が、私の目にさからわずにはいっていったといえよう。彼女たちといつもいっしょだった男たちのひとり、その父親であることは、ナホトカの町なかのインツーストまで、ハバロフスク行の汽車に乗るため停車場に向かう私たちのバスを、一行からわかれたかれらが別れの見送りをしたときにわかったが、船員とも見まごう簡易の恰好で、軽い身ごなしを示していた中年の背の低い太った男がそうであった。そしてそのときひとりの女性、いつもひとりぼっちで船内の廊下や甲板を歩き、ときたま三、四人とかたまっている、はじめの方でみんなの話をだまっていたような女、日本人たちのたむろしているまえを通るときも、はじめの方で見せうつむき加減で通りすぎ、もしまともに顔がぶつかれば、ほほえみをたたえてはなしのきっかけを待ち受けるようにしていた女が、その男の妻で、少女たちの母親であることも知った。そのことは私を意外な面持ちにさせたが、そう言われると、かれらがひとつ家族であることが似つかわしく思えてき、それにあの頑なそうな老婆が加わると、いっそうそれぞれの性格が生きてくるようであった。夫と老婆は私の目にもロシア人らしく見えたが、姉妹二人はアメリカ人のような気がしていた。もっとも二人が英語を使っていたからだったかもしれない。そしてその母親は、髪の毛も黒く、スペインの血をひいているようでもあり、もしかしたらアルメニヤあたりの出身かも知らないところがあった。口もとのまわりの剃らずにのこった生毛と、彼女の皮膚のあさぐろさが、ふとそう思わせたのだったか。彼女がその夫とつれだって歩いているところをついぞ見かけたことはなく、物思いの多い病弱な妻と粗野で健康な夫との組みあわせ、そしてはじめ香港を船出して横浜をすぎナホトカの町の中に消えて行っただこの国の人とも見当のつかぬ一